

賛辞と謝辞—富山真知子先生ご退官にあたって

A Tribute to Professor Machiko Tomiyama —A Balanced Bilingual, a Person of Empathy

守屋 靖代 MORIYA, Yasuyo

● 国際基督教大学
International Christian University

富山真知子先生がICUに着任なさったのは1998年だったから、先生は約20年間ICUにご貢献なさっていることになる。この年度末でご退官なさるにあたり、語学科の教員として、共に英語教育プログラムに責任を持った者として、2008年の教学改革以降は言語教育部門の同僚として、研究者、教育者、行政者としてのご功績を振り返ることで、先生への賛辞、謝辞とした。

今は応用言語学で学位を持つ人が増え、その分野を掲げて活躍する研究者や進学を考える学生も多くなったが、先生がご着任なさった頃は英語教育について応用言語学や第二言語習得で学位を修め活躍している研究者が多くはない時代であった。応用言語学という分野が、理論言語学や文法教育ではない先駆的の分野として確立しようとする時代に、第二言語習得、言語喪失、英語教育のプロフェッショナルとして先生はICUに着任なさった。ICU教養学部語学科をご卒業後、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校で第二言語としての英語教育で修士号を、ペンシルベニア州立大学で応用言語学で博士号を取得なさり、まさにアメリカで先駆けとなる応用言語学の分野で学位を修められたことになる。

個人的なことだが、私と先生は先生が一年上の学年でいらして、まだ学生数が一学年200人ほどだった小さいICUで同時期同じ語学科で学んだのであるが、お互い学生時代に会った記憶がない。

それは先生がICU生の中ではノーブルな学生でいらしたからだと思う。当時交換留学は全学でカリフォルニア大学に年に2名が派遣されるだけで、成績優秀でよほどの英語力があり、1ドル360円の時代であったから、経済的支えなしには交換留学へ行くことはできなかった。当時FEP¹と呼ばれた英語教育プログラムでパターンプラクティスに苦勞し英語コンプレックスに苛まれた大半の学生には交換留学へ行ける人はまさにノーブルな特殊人であり、羨ましいという気持ちも思いつかないほど遠い世界のことだった。その頃は国立大学の学費が年間3万円ほどでICUは年間6万円と私立大学ではいちばん学費がかからない大学であり経済的な理由でICUに入学した学生も多かったが、その中に混じって当時まだ珍しかった帰国子女と呼ばれる海外で教育を受けた子女がいて、アメリカやイギリスで教育を受けたとかインターナショナルスクール出身とか、当時脚光を浴びていた英語教材をもじってウォーキング・リングフォンとも呼ばれたそのような同級生は、学食で同じ一杯50円のうどんをすすっているはずのないような良家の子女であった。海外のインターナショナルスクールで教育を受け、またICU献学に尽力した一萬田尚登氏とご尊父が仕事上のお知り合いという富山先生もそのようなノーブルな子女でいらした。ネイティブの英語力と優秀な成績により交換留学生に富山先生は選ばれて1年間カリフォルニアで学ばれ、「私がICUにいたのは4年のう

ち3年だけだったから、愛校心なんてものはないのよ」と仰るが、後述のように、ファカルティとして戻られてから愛校心なしには不可能と思われる難しい責務の数々を見事にお務めになっている。交換留学で学ばれたUCLAの修士過程にICU卒業後進学なさったのは、カリフォルニア大学の充実した大学院で英語教育について学びたいと思われたからであろう。先生にとってはUCLAがいちばんの「母校」であるとお見受けする。

先生の研究活動についてまず特筆すべきは、応用言語学関連の大規模な国際学会で何度も発表なさっていることである。具体的にスベルを綴らずともこの分野の研究者なら誰でもが知っていて一度は発表したいと願う TESOL,² AAAL,³ GURT,⁴ AILA,⁵ WCAL,⁶ SLRF,⁷ PacSLRF⁸ 等で何度も研究発表をなさり、国内においては最大規模でありご自身評議員をお務めになったJACET⁹やSLA研究会¹⁰でご活躍なさっている。執筆活動も日英両語で続けられ、特に言語習得の中でも言語を忘れる言語喪失に関して次々と研究成果を発表なさり、日本における言語喪失研究の第一人者である。先生が主催者となって「日本における言語喪失を考える」という研究会がICUで開催された時には、国内外からたくさんの参加者があり、日本にも熱心に言語喪失の研究をしている学者がこれだけいるということが明らかになった。

二つの言語を使うことができる人をバイリンガルと呼ぶが、その中で両方の言語で充分機能できるバランスの取れたバイリンガルの方は少なく、大半はどちらかの言語の方が自然に使える、特に読み書きのレベルになると片方に偏るとされる。その稀有な「バランスの取れたバイリンガル」が富山先生であり、会議の議長をお務めになる際、相手によって日本語から英語にまた英語から日本語にスイッチなさるのがとてもスムーズで耳に心地よく、また相手の言語に応じて説明や説得の仕方もいちばん有効な方法で示され、そういうふうによればいいのかと学ぶと共に真のバランスの取れたバイリンガルである先生のことをさらに尊敬申し上げることである。

数々の学術論文を発表なさっている富山先生で

あるが、ご著書の中で特筆すべきは、ご自身が編者となってリーダーシップをとられた「ICUの英語教育－リベラルアーツの理念のもとに－」（研究社、2006年）である。ICUの英語教育プログラムに関して学内では常に議論されていたし、学内のアカウンタビリティ・コミティや大学基準協会による評価等が内向きに行われていたが、プログラムに直接関わる教員による包括的かつ詳細な学外への発信はなされていなかった。ICUの英語教育プログラムが単なる英語の訓練ではなく「リベラル・アーツの枠組みの中で構築されリベラル・アーツ教育の土台を英語で築くプログラム」（p. iii）としてどのように実践され実績を上げているかを紹介するという意図を明確にし、その上でリベラル・アーツについての考察とプログラムの実際について章立てが編まれたものであった。それ以前、英語教育プログラムをリベラル・アーツの説明に取り入れて出版されていた数々の書物から¹¹、武田清子、ウィリアム・スティー、絹川正吉、ゲオハルト・シェーパース、吉岡元子、岡野昌雄、田坂興亜、松岡信之、村上陽一郎、松澤弘陽ら先達によるリベラル・アーツの理念と実践についての議論を元に、英語教育プログラムで教壇に立ち、主任、副主任として長く責任を持った吉岡元子、ピーター・マッキヤグから提供された資料の見直しと検証によって英語教育プログラムの理念を説きおこした上で現状を説明するという先生の発案であった。英語教育において一流の出版社である研究社からぜひうちでとオファーがあり優秀な編集者に恵まれた。英語教育プログラム内での執筆者の募集について、このプログラムは個人のものであるからプログラムに関わっている全ての人のものであるから執筆に参加したい人は英語母語話者でもすべて受け入れることが肝要というお考えをお持ちの富山先生は、日本的気配りとアメリカ的意思表明の確認がおできになるリーダーであった。執筆者が決まり、担当項目の選定や分担、編集者との交渉まで、先生のリーダーシップによって理念と実践の両面からICUの英語教育を紹介する本が仕上がった。出版後の反響は大きく、学会誌の書評欄で幾度か取り上げられ、本が

売れない時代にすぐに重版が決まり、英語教育の専門家だけでなく広く一般に購読された。さらに光栄なことに、2007年度大学英語教育学会賞実践賞を与えられることになり、執筆者9名の内7名で全国大会総会において表彰の榮譽に浴したことは、それまでの英語教育プログラムではなかった榮譽であり、特に「教育実践賞」英語では“Excellence in Teaching”という賞により日々のティーチングの意義が認められたことは執筆者全員に大きな励みとなり、同僚およびそれまでプログラムに関わってきた人たちに改めて感謝したことであった。広島での授与式の後新幹線で帰京する途中、台風で新幹線が止まってしまい、富山先生と二人、売店でわずかに売れ残っていたおつまみを夕飯に長い時間を待った嵐の夜も私には先生とお話しできた思い出の時となった。

先生のリーダーシップは本の編集だけでなく、2008年教養学部がメジャー制度に移行した際にも発揮された。それまでの6学科から学科の垣根を取り払い多数のメジャーを提供するという改革が行われることとなり、その意義や起こりうる問題等さまざまな議論があったが、改革が実行されると決まった後の先生の行動は素早く賢明であった。語学科には英語学、日本語学、フランス語学の3つの専攻があったが言語教育という専攻はなかったため、言語教育のメジャーを作りたいという先生のご提案に賛同した英語学、日本語学、フランス語学の語学科教員と国際関係学科からバイリンガリズムを専門とする教員による新しい「言語教育メジャー」がスタートした。英語科ファカルティは英語教育プログラムの授業を教えることと主任、副主任の責務を負うことが義務であったが、この改革により両方ともなくなってしまった。しかし、ファカルティの関与がなくなって混乱が続く中、富山先生は影になり日向になって英語教育プログラムの運営のためご尽力なされた。

富山先生の教育者としてのご貢献も多岐に及ぶが、その中でも特筆すべきは、英語教職課程の中心として教職課程の学生たちに最先端の応用言語学の知識を授け、また日本における英語教育の課題を批判的に捉え議論する機会を提供なさって

ることである。言語教育の基礎科目「教授法原論」の授業は一年生対象であり、これから連綿と続く教職科目の入り口であることから、毎年100名以上の履修がある大規模クラスであり、次段階の必修科目としての英語科教授法Ⅰ、Ⅱ、最先端の応用言語学の導入である他の専門科目を通して、学生たちは母語でない言語を習得することについて応用言語学の基礎と、日本の教育現状における英語教育の特性と問題点を学び、現場に立った時、伝統や流行によるのではなく現場の状況や学習者の能力や興味に合わせた教授法や指導法を見極めることができる下地を確立することができている。学生が「富山先生」と口に出す時、それは尊敬と畏敬の念が混ざったトーンを帯びていて、先生のプロ意識の高さを厳しいと感じる学生もいるが、先生の鋭い教育者としての目は易きに流れようとする学生の気持ちを見抜き、プロとして学習者の前に立つことの厳しさと喜びを伝えようという奨励の気持ちを強くお持ちである。そうして、富山先生について行こうと決心した学生にはどんなに多忙であってもじっくり向き合い、互いに納得するまで指導なさる。立派なりサーチを卒論として仕上げる学生が富山先生の下で育ち、全国津々浦々の中学や高校で教鞭を取りあるいは英語圏や国内の大学院へ進んだ後教育と研究の道に進んだ者も多い。卒業生が訪ねて来れば忙しいスケジュールを調整して現場の苦勞を聞くことを厭わず、卒業後も頼れるカウンセラーの役目を果たされ、先生に話を聞いてもらって背中を押してもらって卒業生も多い。先生ご自身が、在学生にも卒業生にもロール・モデルになられている証拠である。ある卒業生は、「現場で経験を積むほど、在学中に教わった富山先生の影響はますます大きくなり、またそのような先生を目指したいと思う」と言う。

先生の授業で感化を受けるのは教職課程や言語教育メジャーの学生だけではない。他大学では受けられないICUらしい科目と言われるジェネード（一般教育）の科目、「言語教育」で言語教育や教職課程に関心のなかった学生が、自分たちが中高で経験し入試のため鍛えられた受験英語、ICU入

学直後に巻き込まれた英語教育プログラムに実は深い意味と意図があることが分かったと驚嘆し、ICU生全員にこのジェネードを必修とすべきという意見が出るほど触発され、先生がこのジェネードを開講なさると、原論のコースと同様、自分の経験を客体化できるそのような学生が続出する。先生ご自身がお書きになっているように、リベラル・アーツの理念を達成するための語学プログラムは、「英語の理解力を高め、批判的に分析、統合、評価を経て、発信することで社会や世界に対する責任を果たす人物の養成」を目的とし、だからこそすべての語学プログラムは「リベラル・アーツに通じて」いる（「ICUの英語教育－リベラルアーツの理念のもとに－」p. 23）ということもICUを構成するすべての人に知ってもらいたいという強いお気持ちもともとと言語教育に関心のなかった学生にも伝わるのである。さらに、大学院では英語教育の分野で修士号、博士号を目指して学ぶ院生を多数指導なさり、富山教授の下で学びたいと国内及び海外から常に応募者があり、大学院の言語教育専攻は先生の存在なしでは成り立たない。研究者として先生の薫陶を受けた院生たちは日本のみならず海外のアカデミアでも教育と研究に邁進している。

先生の大学への貢献となるとどれから述べるか迷うほど、たくさんの職責で母校のためご尽力なされた。先生の多数の行政職リストの内いちばんマイナーなものであるが、私が英語教育プログラムの主任となった時、先生はICUご着任後すぐのことで、語学科ファカルティ内の順番からすればまだ早かったにも拘わらず、副主任の責務をお引き受け下された。当時2学年約1400名の学生と約30名のフルタイムの教員を擁するプログラムで日々煩雑な業務に追われたが、先生は主任の私を立てて下さり、雑務だけでなく難しい局面では筋の通ったモラル・サポートを迷わずして下さった。先生と違って私には母語でない英語で様々な国籍と文化を持つ英語教育プログラムスタッフと対峙する時、大きな試練と思われる時にも、振り返って富山先生の意見を聞けば自分の判断が間違っていないことを確認することができた。私の

後任に富山先生が主任となられ、兼担ファカルティと言われていた語学科ファカルティの内、それまでは特定のファカルティにしか主任副主任の責務は回らなかったのが、これ以降、順番で担当するというシステムが動き出す。副主任をファカルティでなくインストラクターから選出することも富山先生が主任の時に始められたことであり、今ではふたりのインストラクターが副主任の責務に就くようになって続けられている。2年の主任の年季が明けるという時、もう1年主任の仕事を先生が引き受けなくてはならない事態が起こってしまった。普通なら断って当然だが、先生は状況を熟慮なさり、自分が引き受けることがプログラム運営にいちばん支障がないと賢察なさって、3年目もお引き受けになった。

その後ファカルティとして研究業績と教育実績を着実に上げられる中、教養学部副部長として学部長をお支えになり、先生の後、副部長の仕事は3人のファカルティに分配され今に至るので、先生は実に3人分の仕事を一人でこなされたことになる。副部長の仕事が3人に分割されると聞いた際にも先生は、「私はいつも損な役回りになってしまうのよねえ」と静かに述懐なさっただけであった。それから、大学院教育学研究科長、大学院心理・教育学専攻主任、教育研究所所長と要職を歴任され、大学の表にも裏にも深く関わられている。聡明で仕事が早く、しかも日英両語でどんな込み入ったことでもたちまち理解して下さる先生であるから、学生はもちろん、同僚の教員、メジャーの異なる教員、直接関わらなくなった英語教育プログラムのスタッフ、カウンセリングセンターや学修支援室、事務方に至るまで「富山先生におすがり」する。研究室の前には面談を待つ学生が「とぐるを巻く」ことが常であり、ひと言お伝えしたいと思って研究室を訪ねても面談中のことが多くすぐにお目にかかることはかなわない。特に英語教育プログラムで問題が生じた際には行政も先生を頼り、長くマネジメント委員会でプログラムの運営や人事に携わられた。理不尽と思われることも最初からそう決め付けず真摯に話を聞くという先生の姿勢には、かつてチャペルアワー

のお証で強調なさった empathy を尊重するという姿勢がある。共感とか感情移入と訳される empathy という言葉であるが、先生のそれはもっと高尚なフィロソフィーであり、相手の言うことをよく聞き、気持ちを理解することで歩み寄り公平、公正を図るという意図のように思われる。普通の人には難しいことであるが、常に世の光地の塩であろうとなさる。そして、不幸なことにそのような empathy を持ち得ない相手には抗うことをなさらず、それはもちろん大変な忍耐を要することであるが、卓越した判断力で虚しい言い争いを忌避され、沈黙を守られる。

このように、研究者、教育者、行政者として秀でた富山先生であるが、豊かな人間性に満ち溢れたチャーミングな方である。熱烈な巨人ファンでいらして、巨人の勝った翌日面談に行けばご機嫌がいいと学生の噂になるほどであるし、相当のグルメでいらして、英語教育プログラムの主任をなさった時、スタッフをご自宅に招いてご馳走して下さった。日本とアメリカのお手製の家庭料理の数々が並び、ご夫君もロボット研究の第一人者という科学者であられるのに、ワインを抜いたり親しく声をかけて下さり、ご家族で素晴らしいおもてなしをして下さった。また、先生と私は誕生日が同じで、学期末試験と重なりいい時期ではないのだが、都合がつけば“Happy birthday to us!”と一緒に祝う光栄に浴した。そのような時も1年ではあるが若輩者である私の方が手配すべきであるのに、グルメ情報に敏感な先生は感じのよい美味しいお店を探して下さり、デパートメントの送別や歓迎会の折にも率先して計画して下さり、私たちはいつも先生の細やかなお心遣いに甘えて来た。公私両面で、幼少時から親しまれたカトリックの精神、noblesse oblige を実践なさっている。

2018年4月、先生がいらっしゃらなくなることでICUは新たな局面を迎える。人が入れ替わるのは組織として当然であるし、表面上何事もなく続いているように見えるであろう。しかし、リベラル・アーツにおける日英両語による言語プログラムの役割を内外に伝えるメッセンジャーとして、そして卒業後教壇に立つにしろ進学するにし

る、ICUの教育の要所要所を、英語や教職に悩める1年生からドクターコースの学生まですべての学生層を日英両語で支えて来られた大きな柱を失うということである。先生が熱心に説き明かし、実践して来られた「その時代の外国語教育における最先端の理論をリベラル・アーツ教育というコンテキストで取り入れ、実践して来た」ICUの教育の価値がこれからも問われるだろう。そうして、そのことは先生ご自身の以下の言葉に集約されている。「これからも時代の要請や学生のニーズに合わせて絶えず具体的変遷を続けるであろうが、リベラル・アーツ教育の土台を英語で築くという目的は変わることはない」（「ICUの英語教育－リベラルアーツの理念のもとに－」p. 23）。切り替えの早い先生は、退官後はもう関係ないと仰ると思われるが、先生が先達から受け継ぎ発展させられた堅固な土台がしっかり守られて行くことを誰よりも願っていらっしゃるに違いない。

注

- 1 Freshman English Program
- 2 Teachers of English to Speakers of Other Languages
- 3 American Association of Applied Linguistics
- 4 Georgetown University Round Table
- 5 Association Internationale de Linguistique Appliquée
- 6 World Congress of Applied Linguistics
- 7 Second Language Research Forum
- 8 Pacific Second Language Research Forum
- 9 Japan Association of College English Teachers, 日本大学英語教育学会
- 10 Second Language Acquisition 研究会
- 11 ICUの先達については敬称略

